

文化審議会第2期博物館部会（第4回）

令和2年11月5日

【島谷部会長】 文化審議会第2期第4回の博物館部会を開催いたします。

本日の議事は、「博物館に求められる現代的課題とその実行体制について」となります。

初めに、文化庁から、博物館に求められる現代的課題と文化庁の取組について御報告を頂きました後に、「デジタル技術等を活用した博物館の魅力発信・人材」につきまして、小布施町教育委員会生涯学習係、高野様から、「小規模館の現状と課題について」、高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）高田様と、吹田市立博物館の五月女様からそれぞれ話題提供を頂き、それらを参考に皆様方から御意見をいただければと考えております。

なお、会議資料は、事務局から皆様に事前にお送りしておりますが、資料が見られるか御確認いただき、何かありましたら事務局に遠慮なくお知らせください。

ではまず、博物館に求められる現代的課題とその実行体制につきまして、文化庁から報告をお願いいたします。稲畑さんお願いします。

【稲畑補佐】 承知いたしました。それでは、事務局から御説明いたします。資料1を御覧いただけますでしょうか。

まず最初のページで、これまでの博物館部会での議論のラップアップと申しますか、これまでの議論の経過を改めて確認したいと思うんですけども、ごく簡単に言いますと、これまで様々な議論をしてまいりましたけれども、現代の博物館では、保存・収集、調査研究、教育・普及といった博物館法で求められる本来的機能に加えて、地域振興、観光、社会的包摂、福祉などの様々な地域の課題への対応や社会的役割というものが複雑化・多様化し続けているとまとめることができようかと思えます。

また、第2期の第1回、第2回で議論いたしました新型コロナウイルスの感染拡大、これへの対応も、非常にホットと申しますと語弊がありますがけれども、非常に喫緊の対応すべきものとして、あるいは博物館のこれまでの課題をより明確に浮かび上がらせるものとして非常に重要だと。新たな日常における在り方を追求することが求められているのではないかと考えてございます。今日は、半田委員から、『博物館研究』の最新号をお配りいただいて、皆様の机にも置かせていただいております。ここでも新型コロナウイルスの感染症下、コロナ禍での博物館という特集を組まれておりますけれども、このような背景の中で、

3つ目の黒丸でございますが、これまでは、第1期の第3回、あるいは前回は、専門職としての学芸員の養成あるいは研修などの資質向上について議論してまいりました。ただ、このような複雑化・多様化し続けている課題に、果たして学芸員だけで対応することができるのかというような問題意識がございます。今回の議論では、学芸員にとどまらず、多様化する現代的な課題に対応するために、博物館全体としてどのようなチームを組めばいいのか、あるいは地域や、館種間、博物館だけではなくてほかの施設間のネットワークの中で、どのような体制を構築すべきかというところまでスコープを広げて議論させていただきたいと考えてございます。

2ページ目を御覧いただけますでしょうか。これは、前々回ですか、少しだけ議論させていただきましたけれども、文化庁としての令和3年度に向けた概算要求の現状でございます。博物館に関するものをピックアップして1枚にまとめてございます。これでも端的に表されているように、1番にコロナ対策と書いておりますし、2番が文化観光の推進の予算、この1,2あたりが予算の割合としては最も多いものとなっておりますけれども、それに加えて、地域と連携、あるいは右を見ていただきますと国際交流など、文化庁の予算だけを見ても様々な課題が博物館には求められているということでございます。

3ページ目以降は、この赤四角をしたものの少し詳しい内容を示したものですので、御参考までに御覧いただきたいと思っております。

ざっとめくっていただいて、7ページ目を御覧いただけますでしょうか。これらの状況を踏まえまして、本日の論点の例として、どのような議論をしていただきたいかというのを示したのがこの7ページ目でございます。総論として、先ほども申し上げましたけれども、博物館が現代的な課題に対応するために、課題について専門的な知識を有する人材を活用する、つまり、学芸員だけではなくて、外部から学芸員以外の人材を博物館の中に置く、あるいは外注のような方法もあるかもしれないですけれども、そのようなことについてどのように考えるか。特に、昨今政府としても非常に力を入れておりますデジタル技術の活用については、一つの課題というよりは横断的な課題として捉えられますけれども、このデジタル技術の活用について、どのような体制と環境整備が必要となるかについても議論したいと思っております。館種によっても違いがあるでしょうし、下から3ポツ目と4ポツめにございますけれども、特に、このような体制を議論するに当たって、困っているといえますか、課題に直面しているのは小規模館ではないかと考えてございまして、近年、文化庁は様々な施策をやってきておりますけれども、なかなかこの規模の小さいところにアプローチしに

くいというようなジレンマを感じてございまして、このようなデジタル化、小規模館というあたりに集中して議論を頂きたいと考えてございます。

そういう文脈から、今日ゲストスピーカーとしてきていただいています小布施町の事例と、あるいは小規模館のネットワークの観点からの事例を御紹介いただいた後で、議論とさせていただきますと考えてございます。

最後の8ページでございます。今日話題提供いただく事例とは別に、文化庁として、このような文脈でどのような取組があるかというものを、ごく簡単ですけれども御紹介しているのが8ページ目でございます。立花家史料館では、Google Arts & Culture、Google がやっている汎用プラットフォームと連携することで、非常に安価にデジタル化を達成しているというような事例でございましたり、右上の古代オリエント博物館では、エドキューター、教育普及の専門人材を雇用することによって、広報を非常に充実させているということでございます。左下、歴民、国立歴史民俗博物館では、情報工学の専門家を外注ではなくて館内で雇用することによって、非常に博物館と密接に連携したデジタル技術の活用を実現しているということです。右下、徳川美術館は、「刀剣乱舞」というゲームのブームがありますけれども、それを背景に広報・マーケティングの専門担当者を配置することによって、来館者を非常に増加させることに成功されているというような事例がございます。このような体制に焦点を当てながら議論させていただきたいと思えます。

以上です。

**【島谷部会長】** どうもありがとうございました。じゃあ続きまして、小布施町の教育委員会生涯学習係の高野様からお話をお願いいたします。たくさん話していただきたいんですが、会議の都合上、最大15分程度でお願いいたします。よろしくお祈りいたします。

**【高野氏】** 小布施町の高野と申します。よろしくお祈りいたします。資料は9ページからになります。当町の事例ということで、1枚おめくりいただきまして10ページをお願いいたします。

まず、当町の簡単な御紹介でございますが、長野県の北の方、長野市の隣に位置しております。人口が約1万1,000人で、面積は長野県で一番小さな町でございます。「栗と北斎と花の町」というキャッチコピーで、栗の産地として、あるいは葛飾北斎の肉筆画を展示する美術館があるということ、それから花の町ということで、年間約130万人の方においでいただいております。

11ページでございます。当町のデジタルアーカイブの事例でございますが、平成21年7

月に、当町の図書館が移転オープンするというで話が始まったわけですが、その際に新しい図書館長を全国公募し、図書館にある様々な資料をアーカイブして公開することをプレゼンした演出家、映像作家の方が採用されたということをしっかきとして、当町のデジタルアーカイブが始まっております。

おめぐりいただきますが、12 ページはその図書館の外観でございます。

13 ページ、デジタルアーカイブのコンセプトでございますが、「100 年後へのおもてなし」「100 年後への贈物」ということで始めまして、国立情報学研究所から講師を招いて、まず勉強会から始めました。当町には町立の博物館が 2 館ありまして、新図書館、それから平成 25 年オープンを予定しておりました公文書館がありますので、その 3 館の連携、MLA 連携を構想する中で、新図書館を目玉事業として始まったものでございます。

14 ページをお願いいたします。当町の事業の構成ですが、大きく 4 つの事業で構成しております、いわゆる博物館関係のアーカイブは、一番上にある「小布施正倉」というもので、博物館、美術館等の作品をアーカイブしたものでございます。それ以外、下の 3 つは、いわゆる人に対して映像記録を残して発信していくというものでございました。

個々の内容の説明、小布施正倉につきましては 15 ページでございます。2 つ目の丸、当町にある「おぶせミュージアム・中島千波館」という現役の日本画家の方の美術館がございます。それから、葛飾北斎を小布施に招いた地元の豪商、高井鴻山の記念館というものがございまして、それらの作品を合計 200 点ほどデジタル化をしました。文化庁さんの文化遺産オンラインへの登録をしまして、公開をしたということでございます。

おめぐりいただきまして 16 ページ、17 ページでございますが、16 ページがその小布施正倉のホームページのトップページで、高井鴻山、北斎等のデジタル作品を載せています。

下はその 2 館の美術館の外観でございます。

18 ページをお願いいたします。18、19、20 は、その他の、博物館とは直接関係ない、当町のオリジナルのデジタルアーカイブとして、「小布施人百選」というのは、小布施の方に、オーラルヒストリーの形でアーカイブしたものを DVD 化したりテキスト化したりして情報発信をしたいという事業で行ったものでございます。

また、19 ページの方は、それを検索する検索システムとしまして、国立情報学研究所の検索エンジン「想-IMAGINE」と連携したシステムを開発したという事業。

もう一枚おめぐりいただきまして、20 ページ、21 ページの方は、当町の周辺に能をベースにした小謡という伝統文化がございまして、そういったことを学ぶ一つのきっかけとし

て、3つ目の丸の「勸進能絵巻」というものをデジタル化をして、下の絵のようにアーカイブしたものを見ていただきながら勉強するというきっかけにしたというものも含めて、当町でデジタルアーカイブの事業として行ったものでございます。

22 ページをお願いいたします。その他小さいものとして、「おぶせ地図ぶらり」という古地図の上に現代の地図を載せた、スマートフォンでも見られる地図を開発したり、町中の小さな民家を借りた図書館の地図と連携させた事業というようなこともやっております。

23 ページは、実際デジタルアーカイブを推進した体制でございます。一番トップは、先ほどの公募の図書館長、元映像作家さんのコンセプトを基にしてやってきたわけですが、それを進める上での専任の職員として、一般職員を1名、学芸員資格を持っている方で、任期付ということで採用した方が1名、それから図書館司書を持っている臨時職員1名を採用しました。全部外注するということではなくて、内部にノウハウを残したいということで選任を設けたということと、作業がかなり煩雑になるということで、兼任で臨時職員8人から12人を雇用したということでございます。それから、国立情報学研究所の方、元日本銀行の情報サービス局の方などにも御協力を頂いて推進したということでございます。

24 ページをお願いいたします。当町のアーカイブ事業は平成21年度から25年度にかけて5か年で実際行いました。総事業費は約4,500万円ということで、そのうち、いわゆる博物館のアーカイブの「小布施正倉」と呼ばれるものは、一番上で約700万円ということでございました。その他の経費は御覧のとおりでございますが、そのうち3分の1ぐらいは下から2番目の黒点の人件費ということで、かなりかかっているということでございます。

また、その下、25ページが総事業費のうちの国、県、町の財源の配分でございます。国の方から21年度から24年度にかけて様々な補助金を頂いて、県の方からは雇用関係の補助金を頂きまして、比率としましては、国が36%、県が20%、町が44%という結果でございました。

26 ページをお願いいたします。現在のデジタルアーカイブの状況でございます。いわゆる博物館アーカイブの「小布施正倉」が、22年度に構築して23年度に公開ということだったんですけども、それ以降の新しい掲載はしておらないで、現在閲覧できる状態のみということになっております。その他、「小布施人百選」、「想」、それから「お肴謡伝承活性化プラン」というものは、24年度から25年度にかけて終了してございまして、現在ではやっておらないという状況でございます。

27 ページ以降は成果ということで書かせていただきました。うちのデジタルアーカイブ事業は、図書館をまず中心に始めたということで、その図書館の移転がきっかけになったということもありまして、小布施町、特に図書館の情報発信に対しては非常に効果があったということで、その下にある入館者も御覧いただければお分かりになりますが、旧図書館は立地条件もあったんですけれども、21年度以降、非常に入館者が増えた状況になってございます。ただ、美術館の方は、21年度は若干増えたようにはなっておりますが、後で効果検証の方でもお話ししますが、直接的な入場増につながったということにはちょっとなっておらないという実情でございまして。

28 ページをお願いいたします。主として図書館の成果で大変恐縮なんですけれども、図書館には非常に効果があったということで、図書館の概念を変えるということの中で、ライブラリーオブザイヤー2011の大賞を受賞したり、「死ぬまでに行ってみたい図書館15」に選定されたりということで、非常に反響がありました。

その中で、デジタルアーカイブ事業をやっていく中で、認知度の向上あるいは町民の皆さんのデジタルアーカイブということへの敷居を下げるというような効果は非常にあったのではないかなと思っております。

うちの方は、この話をお受けたときに失敗事例ということで御紹介させていただくというようなこともあったわけなんですけれども、大きな課題を残した中で、課題と背景を書かせていただきました。人材面での課題、1点は、当初公募でお願いした図書館長が5年の任期で任期満了になりまして、残っていただくというようなこともあったんですけど、最終的には退職されたということで、その事業の構想者が不在になってしまったということが大きいということと、その構想者の人間関係の中で集めてきた職員も同時に退職したということで、一斉にその体制が崩れてしまったということがございまして。それから、構想者が事業を実施している間も、後も、そのアイデアを継続的に発展させることができる人材がいなかった。公の施設の中ではかなり飛び抜けた奇抜なアイデアであったということもありまして、それを引き継げる者がいなかったということと、後任の図書館長が、逆に「ザ・図書館」というような形の、出版社勤務のいわゆるアナログ系を重視する方であったということもあって、ちょっとうまく継続ができなかったというようなこともございまして。

急ぎ早で恐縮です。30 ページをお願いいたします。財政面での課題ですが、当町の首長の2期目の重点政策に図書館の移転がありまして、町民の長年の懸案事項でありました。金額に関係なく、どんどん事業をやれというような勢いでやっていたんですけれども、その中

で事業費が非常に増額していった。年度の始めは、アーカイブ事業の大半、先ほど国庫補助事業の割合を申し上げましたけども、国庫補助事業を頂きまして、特に最初の2年間は、全事業費の8割を国・県の補助事業で賄っておったんですけども、後年は単独になっていたということがありまして、いわゆる経常経費が増えていく中で町の費用が増えていって、非常に小さな町なもので、財源的に厳しくなったということがございます。システム維持費、それから人件費、約200万ほどずつですけれども、小さな町にしては財政的に厳しくて、先ほどの事業を継続していくという判断の中で立ち消えてしまったというような実情がございます。

31 ページでございます。最初、MLA 連携ということでやっておったんですけども、やはりそれはなかなか構想だけでは難しかったということがございまして、3 館に共通しているのは情報発信という面ではあったんですけども、いわゆる保存・伝承という意味では、高井鴻山という歴史的なものであったり、古文書みたいなものを保存して公開するという点では非常に有効だったと思うんですけども、その下の現役日本画家のアーカイブをするという点では、最初は一生懸命やっていたんですけども、やはり著作権の問題だったり、現役作家の作品をアーカイブして公開するのはどうかというような話もあった中で、内部的な話で恐縮ですけど、美術館側が余り乗り気にならなかったという点が1点あるということと、当町は年間130万人の観光客がおいでになって、美術館に来ていただきたいという思いがある中で、やはり現場の美術館サイドとしては、美術館で生の絵を見ていただきたいという思いがずっと強くて、そのところを情報発信というか、映像的な演出でアーカイブすることの意義を美術館側が十分に理解できなかったとか、図書館側も上手に理解していただくことができなかったというような背景があるのではないかなと思っております。

32 ページです。そういったことを踏まえまして、うちの方からの提言というか、こんなことが今後に向けてということでございますが、やはりうちは図書館中心に行ってきたということがありますので、デジタルアーカイブ専門部署を創設する必要があるのではないかなと思っております。アーカイブの意義を理解しながら、組織横断的に推進する部署、あるいは、うちは図書館長がちょっと特殊だったということがあるので、属人的な要素に影響されない部署、それから、アーカイブを専門的に扱える担当者で、しかも、有期雇用とか臨時職員ではなくて、専属的な正規職員の方がよろしいんじゃないかと感じました。

それから33ページの方は、恒常的なシステムの運用ということで、構築費の補助をたく

さん頂いたんですけども、システムの維持とすれば、小さな町ということもあって、そこをカットされてしまったということもありますので、そういったことに補助をいただければということがあります。現在はアーカイブの費用はほぼゼロでして、サーバーの維持費が年間1万円かからないぐらいでやっております。最初に始めるときに、デジタルアーカイブの目的と認識の共有をしっかりとうちの方はできなかったということがあって、図書館主導でやったという意義は大きかったんですけども、3者が余りはっきり理解しないまま進んだまま終わってしまったということがありますので、事業をする前、それからした後、あるいはしている最中に、定期的な事業の効果検証とか情報発信の継続の必要性などを話していく必要があるのではないかと考えております。

こちらからの発表は以上でございます。

**【島谷部会長】** 簡潔にまとめていただきましてありがとうございます。後でこれにつきましても皆さんから質疑応答を頂きたいと思いますが、これだけは今聞いておきたいということが各委員でありましたら、質問していただければと思いますが。

成功事例と今後の課題と両方含む課題であったと思いますが、じゃあこれを踏まえて、次に、組織体制、人員体制の在り方の観点から、小規模館の現状と課題につきまして、あくあびあの高田さんと吹田市博物館の五月女さんから話をお願いいたします。大変恐縮ですが、時間の都合上、お二方で15分ぐらいでお願いいたします。

**【高田氏】** よろしく申し上げます。高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）の高田と申します。「小規模ミュージアムネットワーク（小さいとこネット）」の事務局をさせていただいています。

35 ページがあくあびあの紹介になります。当館から小さいとこネットがスタートしました。1994年に公園の中のビジターセンターとして開館しまして、2009年に指定管理者が今のチームに変わりました。2010年に第1回サミットを開催し、開館20周年のときに博物館相当施設に指定されています。半分水族館、半分標本展示室みたいなところですよ。

36 ページをご覧ください。開催のきっかけを説明させていただきます。兵庫県立人と自然の博物館長、中瀬勲さんがうちの顧問でもあり、指定管理者が替わった最初の講座のときに「小規模博物館でネットワークをつくらうどうか」と。「小規模館の反乱！」みたいな、小規模館で結束して大きいところに負けるなみたいな爆弾発言をされまして、そこでみんな面白そうだなと乗ったのがきっかけになっております。そんなわけで、中瀬さんはこの会の言い出しっぺということですからずっとお付き合いいただいております。じゃあやろう



かということで、2010年から、毎年関係者仕事に余裕のある2月ぐらいの月曜日というところを設定しまして、1回目はあくあぴあ、2回目は大阪府貝塚市の自然遊学館の方で行いました。この2回は非公開で、知り合いを集めて集まるぐらいな感じだったんですけども、第3回に五月女さんが吹田市立博物館で主催していただいた時に、公開じゃないといけないという吹田の事情がありまして公開になり、その後どんどん参加者が増えていき、現在では11回目を企画中というところまで来ています。

番外編としましては、去年のICOM2019の参加や、関東で別チームが派生するとか、いろいろなことが起こりつつあります。

38 ページを見ていただきますと、活動内容は単純で、毎年1回サミット、サミットというのは首脳会議じゃなくて年次ミーティングなんですけど、総会のようなものをやっています。それと、随時のメーリングリストでの情報交換。先ほど言いました関東のチームがいろいろな動きを始めまして、図書館総合展のところで同時開催されていますアート・ミュージアム・アンニューアールへの出展ですとか、今年はコロナの状況で第11回サミットが延期になっているので、Zoomでの意見交換会を5回ぐらい行っています。内容の詳しいところはホームページにありますので、是非御覧ください。

40 ページを見ていただきまして、なぜこの小さいところがこんなに集まって物事をしていくのかというと、皆さん御存じのように、予算が足りない、お客さんが減ってくる、展示が古びてくるというなかなか貧乏な話があるんですけど、これを共同してみんなでやれば、何とか解決することができるんじゃないか。1人でできることは限られていても、寄ってたかって知恵を出せば何とかなるんじゃないかという思いで集まってきているんじゃないかと思います。

今現在、380人ぐらいの会員をメーリングリストの方に登録しておりまして、41ページの図のように、全国津々浦々、大阪から始まったので関西の館が多いんですけど、いろいろなところの人も入ってくださっています。

42 ページを見ていただくと、入会規約は一応あるんですが、あつてないぐらいの緩いつながりを目指してまして、入会資格は興味がある人です。ほかのネットワーク、いろいろな協力機構みたいところでは館長だったり、主任だったり、割と上の方の人の会議が多いようですが、小さいとこネットの場合は、アルバイトでも、友の会会員でも、どなたでも興味がありさえすればということになっています。

入会方法は、私に名刺を下さるだけです。全て無料になっていますので、会計を持たない

ということを今もずっと維持しています。参加費も年会費も何も要りません。

入っていてよかったという事例です。43 ページの一番上の点の、学芸員が 1 人しかいない館がやはり多数ですので、学芸同士で同じ場で話をしにくく、事務方と意見がぶつかったときに自分の意見が合っているのかどうか不安になってくるので、同じ立場での意見交換の場を持つというのがすごく安心感があると。他には、全国のいろいろなジャンルの学芸員さんがいるので、何でも教えてくれます。拾った瓦は何時代のどんなものだとか、蜂の巣ができたので駆除方法は？とか、どんなことでも教えてくれるというのが一番のメリットじゃないかなと思います。

あとは、あげたりもらったりというのがありまして、企画展で使い終わったものや、プリンターを買い替えたのでインクが余っています、みたいな小さいことでも、あげたりもらったりしています。

44 ページです。サミットなのに宣言文はないのかと言われて、ささやま宣言を作りました。これも詳しい内容はホームページにありますけども、「“小さいとこ”だからこそできること」を考えるというこの 1 番の項目をととても大事にしています。

小さいとこネットはこんな感じで 10 年以上やってきていますので、皆さんも、大きい館だからといって物怖じしないで一緒にやっていきましょう。是非私に名刺を下さい。よろしくお願いします。

【五月女氏】 では続きまして、私、吹田市立博物館の五月女と申します。小規模ミュージアムネットワークの続きなわけですけども、それにとどまらず、若干違った視点から話をしたいと思います。特に小規模館の現状と課題というような部分です。

基本的な話のスタンスとしては、小規模館の厳しい状況の中にも、いかに展望を見いだしていくかというような前向きな議論をしたいなと思っています。多様化する博物館の役割・機能への対応の難しさというところですけども、博物館や文化の振興には、全国にある 5,700 ぐらいの博物館のうち、7 割近くを占める市区町村立の博物館、これを仮に小規模館とニアリーイコールのものと考えたとすれば、我々小規模館というのは館数の上ではマジョリティーなわけですね。そういったところを盛り上げていくということが地方創生の観点からも非常に重要になっていくんだらうと思います。

そこに、中小規模館の都道府県立の博物館・美術館だとか、私立の博物館・美術館、これを私は大きな意味ですべて博物館と言っていますけれども、こういった館を含めれば 8 割前後ぐらいが中小規模館と言ってもいいような施設だと思われれます。こういったところを

含めて盛り上げていく必要があると思います。

また、現在国が進めている文化観光だとかデジタル化、国際交流、そういったことの重要性というのは、実は小規模館においても全く同じです。実は私自身も、国際博物館会議の方に深く関与していますし、去年の京都大会の運営にも深く関わりました。さらに一部委員会では小規模ミュージアムネットワークとの共催を実現したというのもあります。また、小規模ミュージアムネットワークでの世話人の立場からも、過去10年ぐらいですか、各館の人と人とを有機的につなぐというような活動をしてまいりました。さらに、私の吹田市立博物館の本業の方ですけども、そちらの方では、ささやかながら、現在担当している万博展のバーチャル特別展示室を開設するとか、そういったこともやっています。

こういったことのなかで取捨選択をせざるを得ないんですけども、優先順位をつけて前向きに活動を展開しています。地域の小規模館の学芸員たちは、地域の人だとか、歴史、文化、自然というものをよく知っています。ですから、こういった資源というのを更に掘り起こして磨き上げることができるのは地域の小規模館であり、また、こうした博物館をプラットフォームとして活動を展開している市民たちというのも重要な存在だと思います。

ただ、小規模館においては、予算規模だとか人員体制が脆弱ですので、そういったところがネックになっていくのかなと。残念ながら、博物館の本来機能を果たすのが、実際のところ精いっぱい館というのもたくさんあるということです。

具体的に観光とかデジタル化と書いてありますが、全部は読み上げませんけれども、全国の博物館の多くは、外国人を含む観光客が押し寄せるような館ではないので、インバウンドで潤うのは一部の博物館です。そういった意味で、観光だけの視点から博物館を見ると、なかなか難しい側面もあるかなと思います。

一方で、観光収入を頼りにしているような館というのは、今は特にコロナ禍において非常に厳しい状況に置かれているかなと。そして、特に指定管理者制度の下での利用料金制というのは、今インバウンドと運命共同体になっていますので、現在危機的状況にあると言ってもいいと思います。これは実は指定管理者に限らず、私立の館にも言えるかと思います。

デジタル化ですけれども、デジタル化というのは目的というよりは手段です。これは実際のところ非常に重要でして、博物館の本来機能というものを代替・発展させることができれば、非常にこれからよりよい活動を展開できると思います。ただ、外向けの活動展開というのが、ここ20年前後ぐらいですか、例えば展示とかイベント系の業務が非常に多くなって、忙しくなっていますので、もともとの本来業務は停滞しているようなところがありま

す。それはうちの博物館も一緒ですけども。そのために、例えば古文書だとか近現代史の資料が廃棄に直面しているところになかなか対応できないという現実があり、そういったところの収集とかデジタル化というのは喫緊の課題かなと思います。

これまでの成果といっても、ふわっとした話ではあるんですが、若干具体的な話もありますね。コウモリ問題とありますけど、これはさっき高田さんも蜂の巣の話をしていましたけども、小規模ミュージアムネットワークのメーリングリストで、中学校の木造校舎を篠山チルドレンミュージアムの館長さんが運営していて、屋根裏でどうもコウモリとおぼしき音が聞こえると。何とか殺さずに平和的に追い出したいというふうなことでメーリングリストに投稿したら、すぐさま、こうもり博物館の学芸員がその方法を教えてくれたりとか、横のつながりでそういったことが可能になっているという面白い展開があります。

あと、これは私の方ですが、万博展のバーチャルミュージアムの中にオンラインシンポジウムとか講演会なんかもユーチューブに上げてリンクを貼っているんですけども、Zoom会議システムを使って展開している小規模ミュージアムネットワークで知り合ったしおんじやま古墳学習館の館長さんに完全な裏方を依頼して運営をお願いしたりとか、そういう持ちつ持たれつの関係です。あと、小規模ミュージアムネットワークの会員相互の展示協力として、例えば、大阪のきしわだ自然資料館の骨と剥製の特別展、これは会員同士の連携によって充実した展示ができたということで、日本展示学会賞なんかももらっているということです。

あと、コミュニティー・エンゲージメントとありますが、これはうちの吹田の館の話になりますが、地域住民の協力を得ることで、博物館が扱うテーマだとか博物館そのものが地域住民にとって自分事化していく。このように博物館が地域のプラットフォームとして機能することが、地域の人々が豊かになる、ある意味ソーシャルキャピタルを形成するような場になるという意味で重要であり、それを目指してきている部分があります。

時間も多分余りないと思うので、提言の方に行きたいと思いますが、まず1つ目ですが、要は何を言いたいかというと、小規模館のいろいろな調査研究とか保存だとか、そういったものも小規模館にとっても重要なんですけども、文化・観光・経済の好循環にそういった調査研究の成果というのを出していくために、その手法について、研修制度といったものが充実できればいいなということ。

それからあと、ここは大分過激なことを言いますが、資料の充実と地域分散。これはつまり、地方の小規模館の資料の充実が重要であるということです。しかし、多くの国内の小規

模な歴史系博物館は資料が必ずしも充実していないという現実がありますので、その理由の一つは、あくまで理由の一つですけれども、大規模館への地域資料の集積ということがあるとすれば、仮に、災害等で大量の資料が損壊するとか、そういったリスクを考えると、一部の資料というのをもともとあった地域、地方に分散する、戻すみたいなことも一案なのではないか。それは地方創生の考え方にも合致しますし、また、ウイズ・コロナの時代の利用者分散の観点からも重要なのではないかなと思います。ただし、もちろん分散する場合はセキュリティとか、保存対策といったところの徹底、それからその財源確保が重要になってくると思います。

あと、人材のプラットフォームの創設が重要だと思います。つまりどういうことかということ、例えば都道府県ごとに人材バンクというのを設けて、どういう人材かということ、分野横断型で、どんな館種でも応用が可能な、例えばデジタル系、保存科学とか、セキュリティとか、博物館教育、学校連携、国際連携、観光だとか、デザイン、広報戦略みたいな、そういったところの専門家というのをどういった形でプールすることによって、小規模館でも共有できるような、そういったシステムがあれば、余り具体的にはここでは申し上げませんが、それも一案かなと思っております。

ちょっと時間を超過して申し訳ありません。以上です。

**【島谷部会長】** どうもありがとうございました。これから時間をたっぷり取りまして、今の提言、発表について皆さんの御意見を頂戴したいと思います。最初の発表では、成功事例のような形で展開していきまされたけれども、館長が替わられて構想者がいなくなったら、あとは課題が残ったということでした。継続性に問題があったということかと思いますが、それをどうやれば継続性が担保できるか。次に、小規模館の連携ということでは、小規模館が連携することによって多くの助け合いが生まれるというような事例であったかと思いません。五月女さんが、爆弾発言というから、ちょっと心配をしました。文化財の共有というんでしょうか、そういったことを提案されたというふうに私は聞こえました。元発掘された場所だった場所に物を返すというのは、現状では非常に難しい部分があるかと思えます。今現在、文化財活用センターが文化財機構の中にできまして、現地での展示をやっていこうというような制度ができております。それを活用して、未来永劫という形ではないんですが、単発的に何年かに1回でも活用してほしいというのが文化庁の施策の中に盛り込まれています。そういったことが十分に周知されていない点も課題かなとは思いますが、今後どういうふうにして展開していくか、皆さんの御意見を頂戴したいと思います。

まず、対面で参加の先生方で、今の2つの発表につきまして御質問等ありましたら、遠慮なく発言をしていただけますでしょうか。じゃあ逢坂委員、お願いいたします。

**【逢坂委員】** 小規模館のいろいろな事例を興味深く聞かせていただきました。大きい施設でも小さい施設でも大きな課題は、人材の確保だと思います。小布施の場合も、常勤の職員は少なく臨時雇用が非常に多い。今どこの施設もその課題に悩まされていると思います。人材プラットフォームの提案もしていただきましたけれども、まず、今後、どの施設も生き生きと活動を継続して、その成果を市民に還元していくためには、人材の確保と制度設計と予算が必要だと思います。小規模館の連携で380人も登録されている活動をなさっていることでお伺いしたいです。様々な課題や自分たちのところでは足りないものを補い合う連携ができることは非常に心強いです。個別に自分の館の活動で何か成果があったことはありますかというのが1つ目の質問です。

それから、小布施では、大変魅力的な活動を行った後に、それを継続することが難しかったことを踏まえて、優秀な人材の確保が大切だというのは実感していらっしゃる。これから人の雇用をある程度定着させる手立てや方向性は、小布施の中では協議されているのでしょうか。

それともう一つ、小布施は栗とか北斎とともに、小さな町でも魅力的な町並みを整えたり、非常に魅力のある活動をされていますが、来場されている130万人の方々、主にどこに行きますでしょうか。それを教えてほしいです。

**【島谷部会長】** どちらからでも結構ですが、お答えをお願いします。

**【高田氏】** 高田です。小さいとこサミットの中での成果について、一番は、サミット開催館というのは持ち回りです。その開催館になったら全国から100名ぐらいの参加者が集まります。それでその館の知名度が上がるということと、皆さんに顔が知れ渡るの、その後の連携というのがすごく取りやすいです。それと、小さい町の博物館であると、うちの館はこんなに知名度があったのかという再発見が行政側からもされますので、館の地位が大分上がっているというようなことも聞きます。今はちょっと難しいですけど、顔を合わせて話をし合いますので、こんなことだったらうちもやっているから一緒にやりましょうよねというふうな連携事業ができたりというような、サミットの後にもいろいろな成果が上がっているようです。私の知らないところでもいろいろな連携事業があるようです。少人数でやっている人たちにとっては、一緒に物事を動かしてすごく成果が上がっていると聞いています。

【五月女氏】　うちの吹田市立博物館の方に何があったかという、正直なところ、多分、高田さんのところに比べるとうちのところはそこまでメリットがあったかと言われれば、ないかもしれないです。私はどっちかという使命感を持ってやっているようなところがあるので。うちは直営館なんです。私は直営の下で正規職員としてやっているのです、よくも悪くも余り困らないみたいなのところがあって、指定管理者館のところでも特に小さめのところというのはやはり厳しいところがある。若しくは直営であったとしても、嘱託で仕事をしているというような方々も多いので、そういったところでは、一回会って名刺交換しただけで、あとは電話で何でも相談できる、メーリングリストで相談できる、すぐさま返事が返ってくるという、それは仲間を得るという意味で重要なことなんだろうと思います。

【島谷部会長】　ありがとうございました。小規模館のメリットというのを語っていただきましたけど、五月女さんの場合は、自前でやっていることもそうなんですけど、ICOMでの活躍によって知名度が非常に上がって、必然的に館の知名度も上がっているというような効用もあるんじゃないかと、勝手に私は思っております。

それでは、小布施の高野さんからお答えいただきたいんですが、私も当初誤解していたんですが、130万人というのは、小布施に来ている方で、館に来ている方ではないですね。

【逢坂委員】　その方たちはどういうところに来るのかというのを伺いたいです。

【島谷部会長】　そういう意味ですね。来場とおっしゃったので。じゃあそれを含めてお願いいたします。

【高野氏】　2点御質問いただいて、1点は人の雇用の関係で、なかなか答えも難しいんですけど、大きな枠組みで、当町の政策が、うちは公立で2つの館があるんですけど、実はもう一館、北斎館という葛飾北斎の美術館が昭和51年にできたんですけど、それができてから劇的に観光客が増えまして、いわゆる美術品を見るために訪れるということが昔のステータスだったんですけど、ここ20年ぐらいで、いわゆる消費型の観光ということがなくなってきました、いわゆる心の充実みたいなことで、いわゆる美術館に行って絵を見ます、栗菓子を買います、お酒を買いますではなくて、花を見て楽しみます、時間だけ過ごしますという方が多くなってきたので、北斎館は多いときは年間35万人いたんですけど、今は10万人ちょっとしか入らない。おぶせミュージアムも10万人いたのが、今は3万人しか入らない。鴻山館も10万人いたのが4万人しか入らないというような実情の中で、先に答えの2番目の方を申し上げますけど、観光客の方がいわゆる美術品を目当てに来ることがなくなってしまうんです。その中で、先ほどの吹田市の方の事例でもあった、美術館

にもいわゆる費用対効果というか、公立であってもなるべく町の財源を使わないでやりましょうということが美術館の中で求められている中で、非常勤職員になっていたり、美術館に対するお金のかけ方がだんだん少なくなっている中で、なかなか今人材という面では厳しいというような状況になっております。

ただ、逆の意味で、現場でしか見られないということではなくて、情報をきちんと発信して、映像的な、視覚的な観点でインターネット等で伝える中で来ていただくということに方向転換していかないと、北斎館はやっているんですけど、公立の私たちの美術館はまだやっていないということが実情でして、ちょっとそこが十分でき切れなかったなど。ごめんなさい、ちょっと答えがずれちゃいましたけど、そんな感じでございます。

**【逢坂委員】** それでも小布施にいらっしゃる方が多いわけですよ。小布施は私も何回か行っているのですが、やはり一つの魅力は町並みを整えたことだと思います。多くの方たちを外から呼び込むためのいろいろな要素があると思いますけど、今はもう北斎館ではなくて、町の雰囲気を楽しむために皆さんがいらっしゃる。そうすると、町並み整備が一番成果があるということでしょうか。まあ図書館もすごく一時的には話題になっていたと思いますし、栗もずっと有名ですけれど。

**【高野氏】** ありがとうございます。うちの町においでになった方がどのような理由でおいでになったかというのは、人によって違うと思うんですけど、1つのコンテンツでいらっしゃるわけではなくて、美術品だけではなくて、いわゆる食べるものとしての栗とか果物がある。見るものとしての美術品とか景観があるというような複合的な要素の中で、本当に今、逢坂委員さんがおっしゃったように、雰囲気を楽しみに来ているということがあるんですね。その中で、美術館は、美術品というよりも、もうちょっと大きなくりの中の文化的な雰囲気を楽しむという中の一つとして小布施においでになる方が非常に多くて、そういった方が総合的な枠の中で小布施においていただいていると思っています。

**【逢坂委員】** ありがとうございます。

**【島谷部会長】** ありがとうございます。いわゆる博物館、美術館を中心とする文化施設を中核とする観光の推進というような形で、文化庁さんと観光庁さんが一緒になって振興されておりますが、そういった形の中で、博物館、美術館がどう生きていくかということが求められているんじゃないかと思います。博物館の作品だけということになりますと、保存管理を考えなければいけないので、絶えず同じものを出すというのは非常に難しいと。そのためにデジタル化が必要であるということになります。デジタルでしか見えないものも



ありますが、本物でしか味わえないものがあるので、その辺のバランスをどう生かしていくかというのが、我々に課せられた課題だと思っております。小布施 130 万ということですが、今コロナで非常に人数が減っておりますが、私の勤務地の太宰府は、令和の年号のこともありましたので、来訪者が 1,000 万なんですね。博物館にどれだけ来てくださるかという、なかなかそうは伸びていきません。文化施設を核とすると言いながらも、神社仏閣も文化施設というふうに広く考え、町並み、伝建地区だとか、そういったものとの共存を考えていかなきゃいけないかなとは思いますが。何かほかの御意見ありましたら。高田委員お願いいたします。

【高田委員】 高田です。博物館のデジタル化の目的の一つに、私は是非これを学校教育連携に使ってもらえたらいいと思っています。というのも、実は私が水族館勤務時代に、1999 年ぐらいから遠隔授業が ISDN 回線を使って始まったときに、その際に館のコンテンツのデジタル化を一気に進めた経緯があります。そうすると、ちょうどその頃から学校教育の情報化というのが始まっていて、2005 年に向けて学校教育現場で高速の通信回線とかパソコンを整備しようとか、直近では子供たちにタブレット端末を持たせようという動きがあります。それからデジタル教科書を作ろうという動きもある中で、博物館がそれに一緒に手を携えてやらない手はないのではないかと実は思っています。などで、そのためにはどうしたらいいかという、博物館のデジタル系のことをやろうと思う方、やっている方は、学会関係でも、教育工学会とかメディア教育学会といったいわゆる情報系の学会がたくさんあるので、この高野さんのところのような活動をそのような学会で発表されているかどうかは分かりませんが、博物館がこれだけデジタル化に一生懸命努めているんだということを教育工学系の方に PR することによって、よりデジタルコンテンツの利用者が、学校教育というところも一つの活用先として広がっていくのではないかと感じます。

それから、実は今、デジタル教科書を作るという動きが形になっていますが、先日、Zoom で、遠隔で小学校 2 年生のスイミーの国語の授業を一度したことがありますけれども、このときに、教科書会社が作ったデジタル教科書が、使っているコンテンツが、専門家から見てかなり間違っているんですね。なので、今後、学校のデジタル教科書を作るときに、是非専門家の博物館の部隊もこういうシーンに呼び出していただいて、このコンテンツが間違いないかというのを専門家にもチェックしてもらおうという体制ができることによって、学校のデジタル教科書を整備する中に博物館が役立つんだということの PR にもなるんじゃないかなとちょっと感じました。

感想も含めて、以上です。

【島谷部会長】 ありがとうございます。教科書作成において、博物館関係者の活用というお話がありましたけど、これは博物館関係者がというより、教科書会社並びに教科書課がどういうふうにするかです。私も教科書検定を10年ぐらい担当しましたので、その辺の事情はよく分かっているんですけど、各教科によって全く考え方が違いますので、そこにどれだけ影響を与えることができるかどうかというのは非常に問題かと思います。ただ、教科書に載っているものというのは、子供たちは非常に敏感ですので、教科書に載っているものがここに出ているよというだけで反応が全然違います。だから、よく私、話をするんですけど、印象派の作品をあちこちで見ますけれども、作品を鑑賞に行っているのか、知っているものを確認に行っているのかといったら、後者の方が多いような気がするんですね。だから、本当に鑑賞する、どうしたらいいのかという見方を教えてあげるというのも我々の仕事かなとは思っています。

ほかの方で、川端委員から手が挙がっておりますので、川端委員お願いいたします。

【川端委員】 2点あるんですけど、1点は、小布施町のデジタルアーカイブ事業に関してなんですけれども、途中席を外したもので、理解が間違っていたら申し訳ないのですが、博物館の方からは資料を提供して、デジタルアーカイブ化して、それを図書館での有効な利用という形だったのかなとは理解したんですけども、逆に、博物館側からのいろいろなリクエストというんですか、単に所蔵作品のデジタル化だけではなくて、もっと図書館の持っている機能を博物館で使ってみたりとか、そういうふうなリクエストとかいうのはなかったんでしょうかということをお聞きしたいのと、図書館の方でいうと、博物館が持っているいろいろな情報というのをまだなかなか十分活用できていないんじゃないのかなということも考えていまして、何かそういうふうな連携を進めていけないかなというのを何となく頭の中で今もやもや考えているところはあるんですけども、その辺り、何かヒントになることを教えていただければいいかなと考えています。

2点目は、小さいとこサミットというのは非常に近いところにある存在なので、ある程度理解しているつもりなんですけども、高田さんのところのあくあびあもそうですけども、大きいところの支援をうまく利用していくことによって、小さいところも活躍できるというか、いい活動ができるんじゃないかと思ったりし、逆に、大きいところから見ると、そういうふうな視点もあったのかというふうな気づきもいろいろあったりして、実は2週間後ぐらいに共同で観察会を私自身が行うんですけども、そういう意味でも、小さいとこだけじゃ

なくて、やはり大きいところも引きずり込んでというか、そういうことを積極的に今もやられていると思いますけれども、もっと全国いろいろなところでそういうものができていけばいいんじゃないかなと思っています。蛇足ですが、なかなかほかの地域では、大阪のようにがめつくいけないのかもしれないですけども、いろいろな地域でそういうものが広がっていったらいいんじゃないかなと思いました。2点目は感想です。

**【高野氏】** ありがとうございます。博物館側からのリクエストがなかったかということなんですけれども、正直言うと余りなかったということで、理由は、先ほどちょっと事例の中でも申し上げたんですけど、余り博物館側がアーカイブにある意味積極的ではなかったと。最初の動機づけの段階ではやってみようかという話だったんですけど、実際、今考えれば、例えば図書館にも共同的な資料であったり、作家さんの本もあって、そういったものをアーカイブしたものを、演出家の先生であったので、それを例えば図書館でも、何らか本の紹介と併せて美術品の講座を開くとか、ワークショップを開くみたいなことをやればよかったんでしょうけど、いわゆる美術作品を撮ります、保存しますという領域からちょっと逸脱できなかったという部分がございます。図書館側としては、その美術品の保存という観点からいくと余り乗り気ではなくて、主導した図書館長が映像作家さんだということもあって、人の動きというものを演出したいという思いがあったので、それを本当は美術品の演出という意味で展開できればよかったかもしれないんですけど、我々がやった実態の中ではちそこまでは至らなかったということがございます。

**【川端委員】** どうもありがとうございます。

**【島谷部会長】** ありがとうございます。今回、小中規模館の話がかなり出ておりますので、恐らく、この会議に出席している方の中で、一番博物館を回っていらっしゃるだろうという方が京都にいらっしゃいますので、栗原さんから御意見を頂戴したいと思いますが、いかがでしょうか。

**【栗原オブザーバー】** 私でいいんですか。

**【島谷部会長】** はい。

**【栗原オブザーバー】** ありがとうございます。1つ確認をさせていただきたいんですけども、小規模ミュージアムネットワーク、私の理解では、これは先ほど説明があったように、無料で誰でも入れるということから、各館として入っているわけではなくて、多分みんな個人個人で入っているネットワークなんだろうと思うんですよね。だから、館を代表して入っているわけじゃないので、割と気軽にネットワークに参加できて、しかも、いろいろな館種

の方々がいるので、いろいろな情報が交じり合っ、いろいろな情報交換ができるという、半ば勉強会的な要素が大きいのかなという気がします。だから、もし違っていたら訂正してほしいんですが、逆に言うと、そういうネットワークが広がることによっていろいろな人脈、情報が広まっていって、その中からいろいろなヒントが出てきて、それをそのネットワークに入っている学芸員の方々が、館長なり設置者なりに、実は誰々からこんな話を聞いたんだけど、うちでできませんかと言って、それをだんだん事業化していくという、そういうメリットがあるんじゃないかなと思います。逆に、いわゆる日本博物館協会のような組織だと、大体館として加盟しますので、館長レベルが会議に出ていくんだけど、なかなか各学芸員までは情報が行き渡らないというある意味対極的な状況にあるので、そういったところのメリットがあったりするのかなという気はします。

だからそういう観点で、別に日博協とか全美が悪いというわけじゃないですが、そういう大きなネットワークとは違うメリットがあったら教えてもらえたら有り難いなと思っています。

それと、2つ目は提案なんですけれども、これは前に文化庁さんにも言ったことがあるんですが、冒頭に紹介のあった、地域と共働した博物館創造活動支援事業、これは御案内のとおり、登録博物館又は相当施設が中核館でないと申請できないと思うんですけども、県博協とか、公害資料館ネットワークとか、人権ネットとかいろいろな博物館のネットワークがありますけど、そういうネットワーク単位で何かこの補助事業に参画をして、そういったネットワーク活動にお金が行くような、補助金が出るようなシステムがあった方がいいんじゃないかなと思います。実際には、登録博物館を中核館とした実行委員会を作れば申請資格はあるのかもしれませんが、何かこういう県博協やネットワークをより一層生かすような補助金システムというのができたらいいんじゃないかなと思います。それは1つ提案でございます。

以上でございます。

**【島谷部会長】** 提案と感想を頂きましてありがとうございました。ネットワークに補助金をというのがありました。私が答えるべきじゃないんでしょうけど、そういうためにつくられたのがクラスター制度ではないかなと思いますので、クラスターの仕組みをしっかり把握した上で、そこでネットワークをつくって申請していただくというのが一番いい方法かなと思います。そのクラスター制度を理解して申請書を書き上げるというのが、小規模館だとなかなかできないというのが現状だと思います。そこをハードルを下げて申請しやす

くするという方法は、何かまた考える必要があろうかなと思います。

栗原さんからの質問がありましたが、お答えをお願いいたします。

【高田氏】 小規模ネットのいろいろな交流というのは本当におっしゃるとおりでして、例えばうちの館で言うと、五月女さんにつながりができたことで ICOM に誘っていただいて、参加できたんですけれども、多分それがなくて直接情報を見てあいまいなま行きたいですと言ったら、高額だから駄目と言われると思うんですね。どういう意義があつてという情報を先に得てから上司に相談できるという、それは結構大きなメリットかなと思います。

自分たち、下っ端同士の悩みというのはやはりありまして、アルバイトさん特有の悩みですとか、展示交流員さん特有の悩みですとか、あと、友の会とかボランティア、運営している人たちというのが直接担当者同士で話す機会というのは実際余りなくて、うちはどうしているのとか、言うことを聞かないボランティアさんが来たときどうするのみたいなぶつちやけ話が出たりとかというのは、大きな場ではできないので、そういうものをこっそりできる場というのは必要じゃないかなと思っています。

【栗原オブザーバー】 ありがとうございます。

【五月女氏】 私にとっては、ほとんど飲み会みたいなものと言ったら若干場違いかもしれませんが、でも、そんなもので、要はそういう空気感の中で行うことが、むしろそこから広がっていく、そこから仕事につながっていく、飲みニケーションみたいな話とも近いと思うんですけれども、むしろそっちサイドに注目したものなんだろうなと私は思いますね。だから、組織同士ではないというのもそのとおりでして、そういうふうなざつくばらんな話ができる、それも何か困っている人たち同士が、1年に1回、七夕で会うかのように会って、それ以外はネット上でメーリングリストでというのは、そういった何か仲間ができる感覚、そういう中で内輪話ができるとか、時々愚痴を言ったりだとか、何か外の世界を知ることが重要な会になっているんだろうなと思います。

【島谷部会長】 ありがとうございます。栗原さんから日博協という声が出ましたので、日博協の立場で半田さんから何か。

【半田委員】 ありがとうございます。確かに日博協は組織単位ですが、私も小さいとこのメンバーですので、館長さんだけではなく学芸員さんとも出来るだけお話するように努めています。

小布施のケースですけれども、これは今後のこの部会の議論にとっても非常に重要なキーワードを幾つか、内情も含めて今日は高野さんがよくお話しくくださったなと思って、本当に

有り難いと思っています。1つは、今度また改めて、やっとまとまりました令和元年度の博物館総合調査のデータについてお話しさせていただく機会を持ちたいと思いますが、その中で1つ、博物館の所管が教育委員会から首長に移りつつある比率が高くなっているという中で、じゃあ首長部局に移った公立館がどういうふうに活動を継続していくのかというその継続性について、小布施は、やはり今課題を抱えた過渡期におられると思いました。

それともう一つは、人材の件で、全体の博物館の中で、正職員としての学芸員について非常勤の比率が高まりつつあって、その流れが止まらないという状況の中において、これから博物館が持続的な運営を維持していくというのが非常に難しくなるだろうということが1つ。

それからもう一つは、公募された館長さんがお連れになった非常勤の学芸員さん1人というのは、本当にこの前もお話ししましたが、日本の博物館の典型的な姿が、館長1人、学芸員1人、事務員1人という状況が続いていながら、その部分は改善されないまま、デジタル化であるとか、観光への貢献であるとかを進めることが求められて、本来業務が回らない状況で仕事が増えているという状況がずっと続いていて、博物館を支えるインフラ部分の整備が追いつかない。しかし、博物館への役割、期待は増え続けているという状況が鮮明に見えてくる事例だったと思うんですね。こうした部分は、この分科会でも、博物館政策の方向性も含めた博物館制度の在り方を議論する必要性を認識する上でも、とても重要な御発表だったと思って、感謝申し上げたいと思います。

**【島谷部会長】** どうもありがとうございました。先ほど、五月女さんの発表の最後の方で人材共有という話が出たと思うんですけども、デジタル化に関して、デジタル専門の人間を1人雇うということは、小規模館では不可能に近いので、小規模館同士でデジタルをやるときの人材共有で何か面倒を見るというようなことができる人がいれば、非常に便利だと思います。じゃあ、その人の人件費はどこで出すのが課題です。そういった点を文化庁さんの補助金で面倒が見られるようなことがあるのか、それをクラスター制度を使うのか、今、課題が見えてきたのではないかと思います。

利用する人の立場で今のお話を聞いて、浦島さんあたりはどういうふうに思われたのか、ちょっと御意見をいただければ。

**【浦島委員】** 浦島と申します。全く話が関係なくなっちゃうんですけど、お話を聞いて思い出したのが、2018年ぐらいに神奈川県近代美術館で「貝の道」という展覧会をやったんです。それは大阪の民博で持っているいろいろな貝の装飾品を美術館に持ってきてや

るといふ展覧会で、民博の美術品目的で収集しているものでないものを持ってきて、美の意味をつけて展示するといふのは、それも結構面白いなと思つたんですけど、その展覧会で、神奈川県立近代美術館の隣に葉山しおさい博物館といふ自然史の博物館があつて、その学芸員さんが、その具を自然史の目線で解説するといふのがあつて、そういう分野を越えた展覧会といふのは、こういう小さなネットワークをうまく使えば、全国各地で実現できるんじゃないかと思つて、さつき川端委員さんでしたか、大きな組織と小さな組織がうまく連携できるといふのも、それもそういうまいネットワークの使い方でも可能じゃないかなと。近代美術館の展示物も民博から借りてきたものなので、大きな美術館だったり、そういう文化財を小さなところにいきなり持ってくるといふのはすごく難しいかもしれないんですけど、そういう中規模館をうまく使って、その周辺で寄つてたかつていろいろな目線で見るといふのは、利用者からしたらすごく面白い展覧会になるかなといふのをいろいろな皆さんのお話を聞いて考えた次第です。

すみません、取っ散らかつて余り関係なくなつちやつたんですけど。

**【島谷部会長】** 突然指名してすみません、ありがとうございます。博物館が持っている資産を上手に活用し合うといふことが大きな課題として見えてきたのではないかなと思つています。と同時に、先ほど来出てきた話の中で、教育との兼ね合いといふこともありますので、純粹に教育博物館といふわけではないんですが、古田委員の立場で、御意見を願ひします。

**【古田委員】** ありがとうございます。ではちょっと発言させていただきますが、1つは、ごく最近起こつた事例だけ、大規模館の悩みといふんですけれども、それは、うちはそんなに大規模だとは思つていないんですが、今度、そんな大きな展覧会じゃないんですが、花鳥画の展覧会をやろうと思つて、花とか鳥だとかの名前がどうも不安だといふので、上野にある大きな大規模館に、こういうことで御協力いただけないでしょうかといつて非常に丁寧に訪ねていったのですが、駄目でした。大規模館といふのはなかなかやはり、どうして駄目かといふのは教えてくれなかつたんですけれども、どうもちゃんとした見返りがないと、最近研究者も忙しいし、なかなか館として動けないんですよと言われて、あ、大規模館だと思つて。まあそれは一つの身近な例なんですけれども、なかなかサイズが合わないとうまく動かないといふのは、現実のところ、いろいろな場面であるんじゃないかなと思つていますよ。それは、私はかなりサイズの違うところを3か所ぐらい動いているので、すごく感じることもなんです。ですから、今は、お話のとおり、小さなところ同士はうまくネットワークをつ

なぜやすいというのは本当にそうだと思いますし、国立系大規模は、もうそれだけで何か大変大きな仕事をするべき使命を持ってつながっているんでしょうけども、どうもその間というか、うまく全体をといたときに課題がいろいろ見えてくるんだろうなというのが、結局はこの分科会の大きな悩みということなのかなと思って伺っておりました。

2つ目は、今、利用する側のどうでしょうかということなんですけども、今のお話で、結局は、見てもらうとか使ってもらうとか、活用するというをどのように広げればいいのかということで、例えば、学習の面で連携したらどうかとか、そういう話があります。僕は最近、本当に最も小さい、2人でやっているんですけども、大学の歴史のアーカイブセンターを創りました。これはまだ立ち上げて、コロナになって、ちゃんと立っていないんですけども、1つだけ目標を抱えているのは、今までは、資料をただ保存してきたんですよ。だけれども、それをどうすれば活用できるのかというのを考えたときには、これは自分たち、私たち、まあ私も研究者ですけども、私が活用するのではなくて、誰かに使ってもらおうという考え方で、博物館はどんなに大きくても小さくても、その考え方がなければなかなか開いていけないと思います。つまり、使い方を、持っている側が限定するのではなくて、使い方自由という、利用者側がどういうふうに使ってみたいかみたいな、そういう開かれ方をどんどんしていかないと結局つながらないんじゃないかと。今、そういうつもりで自分たちが持っている資料というのを公開しなくちゃいけないとは思っているんですけども、そのためには、やはり先立つものと、人員というか、本当にそれを持続的に運営していただくの体力を持たないと、それはもちろん難しいことなんですよね。そういったことを訴える場というのが必要かなと思って伺っていました。

以上です。

**【島谷部会長】** ありがとうございます。最後に古田委員がおっしゃいましたように、アーカイブするためにはお金と人が要るということ、それを継続するためにはお金が終わったらもうそれができないということではなくて、その館自体でアーカイブするだけではなくて、そのアーカイブがどこにつながれば、全部それが見えるような形になっていくということが今後求められているところかなと思います。

今、アメリカにある日本美術のアーカイブとして、ミネアポリス美術館にやってもらっていますし、仏教美術のネットワークとしては、法政大学がヨーロッパのものをやっています。そういったものをどこかで一元化できるようなことができ、そこに協力することによって、維持管理もできるというような形ができると、また違った展開になっていくのではない



かなとは思いますが。

佐々木委員よろしく願いいたします。

【佐々木委員】 古田先生からもありましたが、小さいところの集まりと大きいところの集まりがあります。大きいところの役割ですけれども、五月女さんからの提案がありました人材プールという考え方は非常に大事だと思うんですね、プラットフォームを創ると。都道府県の博物館は、県博協の事務局をやっていたりして、研修やなネットワークづくりを職務としてやっているところもあります。その役割は大きいと思うんですね。そういうところに五月女さんの提案のようなデジタルのことが分かる人材をプールしたり、保存科学のことで小さいところを支援したりということをやすべきだと思います。その前提には、都道府県レベルの文化政策がまずあって、その下で、県立なりの施設がどういう役割を果たすかという位置づけをしっかりとしないと、うまく動いていけないと思うんですね。そのこと自体を国が、促したり、補助金等で支援したりというような役割分担ができてくるといいのかなと。

私は、都立の美術館・博物館を運営する財団におりますけれども、ぐるっとパスという、都内、首都圏 100 館ぐらいの施設をつなぐ周遊チケットの事務局をやっておりました。小さいところも大きいところも年に何回か集まるんですけども、その時々話題、インバウンドに対してどうするかとか、デジタルに対してどうするかというようなことを気軽に話し合ったりしています。小さいところのお話も出ましたけれども、人脈ができるってすごく喜ばれます。同じサービスを一緒につくっている、事業を一緒にやっているという一体感もあるのと同時に、ネットワークづくりができるというところで非常に喜ばれておると。これも東京都の施策として、共通パスをやるというバックボーンがあるのでコーディネートもできます。そうした仕組みが整うといいのかなと感じております。都道府県レベルの博物館政策というのはあるのかというところが疑問なところで、こういうところに芯を入れていかないと動いていかないんじゃないかなと見えるわけです。

実は私も小さいところのネットワークに入れてもらっていて、すごく光栄なんですけれども、恐らく日本一緩くて、日本一機動力のある集まりなんじゃないかなと思って、刺激を受けております。今日は高田さんと五月女さんにはウェブ上でということになりましたが、お疲れさまです。ありがとうございます。

以上です。

【島谷部会長】 ありがとうございます。じゃあ続いて伊藤委員、手が挙がっているようですので、お願いいたします。

【伊藤委員】 皆さん御無沙汰をしております。完全に忘れられている伊藤でございます。なかなかコロナでこれに参加できずに、本当に申し訳なかったですが、今日、皆さんのお話を聞いて、大変いろいろなことを勉強させていただいています。

その中で、首長として、これからの地域の博物館にどういうことを期待しているか、あるいはそこで働いている学芸員さんにどういうことを期待しているかを、私なりの大変浅はかな考えですけど、少しお話をさせていただきたいと思います。

今、コロナの中で、会いたい人に会えない、行きたいところに行けないという、本当につらい現状が続いています。そういう中で、日本人の優しさ、たくましさで乗り越えられると思っていますけども、この環境の中で少し変わってきたのは、何か人と一緒にやりたい、人とのつながりを持ちたいと。その人とのつながりの大切さみたいなものが本当に再確認されているんじゃないかな、そんな気がしています。

それで、先ほどの小布施の皆さんのお話やあくあびあさんのお話をお聞きして、やはりそういう素晴らしい博物館の中で働いてみえる学芸員の方々が、本当に熱い思いを持って、やはり誇りを持って、人にいろいろなことを投げかけてみえる結果が、やはり人の心に伝わって、よし、あそこへ行きたい、そんなふうに伝わっているような気がしました。本当にそれは勉強になります。

私どもも実は文化の森という、今年20年を迎える本当に小さな博物館があるんですけども、先日、本当はメモリアルをやりたかったんですが、コロナ禍でできなかったんですけど、そこにお越しいただいた方たちがおっしゃっていただいて本当にうれしかったのは、小学校のときにここに来ただけで、そのおかげで今があるんだと。あるいはそういうサポートをされている方たちも、子供たちがすごい目を輝かせていろいろな質問をしてくれたからすごい自分の自信になったとか、本当に人と人とのつながりの場をこの文化の森がつくってくれていると。私はその人を連れて行きたくなる場所が今、文化の森になっているということで、本当に皆さんに感謝をしています。

これからの私ども地方の博物館の役割というか、そんな大きなことは言えないですけども、やはり誇りをつくる、人をつくる、そして町をつくっていく、そういった面では重要な場所だと私は思っています。そのためには、本物を見せるということは非常に大事だと思いますけれども、その本物を見せた後に、例えばその背景にどんな人間関係があったとか、どんなつらい人生があったとか、どんなに素晴らしいことがあったといった人間的なものをやはり発信していきたいと思っています。じゃあ本物って一体何なんだといういろいろな

問題があるんですけど、少し話はそれますが、私どもの地方の人間にとって、これは今回、観光ということも1つ挙がっていますけれども、本当に素晴らしい大観光地の京都とか、東京もそうかと思いますが、観光という文字が、素晴らしい「光を観る」と書いてあります。ですが、私どもにとっては、観光という言葉は、「観られて光る」、つまりいろいろな人に見ていただいて、すごいところだとか、すごいものがあるとか、そういう意味で私は観光というものを捉えています。ですから、地域の誇りづくりに貢献できるものを是非みんなと共有していきたいと思っています。

そういう中で、やはり学芸員さんの役割というのは物すごく大切なんですね。本物、例えばちょっと表現は悪いですけども、金箔の素晴らしい国宝をいろいろな方に御説明する学芸員さんは本当に素晴らしい仕事をしてみえると思います。だけれども、私どもが求める学芸員さんというのは、物を輝かせるだけではなくて、人を輝かせる、人の心に訴えることができる学芸員さんが本当に大事だと思っています。ですから、本物を説明する知識とか様々な経験は絶対要ると思いますけれども、それで終わりではなくて、その背景にあるいろいろな歴史的なもの、あるいは人間的なものを話して、見る人に疑問を持たせるとか、何でなんだろうという様々な興味を持たせる、そういう人に話しかけられるような学芸員さんが私は是非欲しい、そう思っています。

さきに人のネットワークということをおっしゃったんですが、本当に私は大事だと思っていて、学芸員さんたちがいろいろな知識を持った上で、先ほどお話しされたお二方もまさしくそうだと思いますけれども、物すごい熱意を持ってみえるんですね。そういう方たちがお互いに、できれば直接会っていろいろなことを話して、よし、じゃあ自分もこんなことをやってみようみたいないろいろな勉強をさせていただいてこちらへ帰っていく。そして、学芸員さんというのは、その現場、館の中にいるだけではなくて、自由に外へ行って、いろいろなものを見て、いろいろなものを話していく、そういうことができる学芸員さんが欲しい、そういうふうには思っています。

ですから、うちの博物館である文化の森の一番の役割は、地域の人づくり、誇りづくり、そして全体が盛り上がるようなまちづくり、こういうことがやれるような場所で、私どもは一生懸命努力していきたいと思っております。

以上です。

【島谷部会長】 伊藤市長、ありがとうございました。首長さんの立場から熱く語っていただくと、学芸の仕事をしている人間としては、とても有り難いです。感謝申し上げます。

今のご発言の中にもいろいろなことがありましたけれども、博物館は、収蔵品が一番大切に考えられますけれども、収蔵品に加えて、そこで働いている人というのがとても大切に、学芸だけではなくて、事務の人であれ、どんな人であれ、博物館を支えてくれる人も財産だと思っております。

さらには、地域とのつながり、ほかの場所とのつながり、世界とのつながり、いろいろなつながりが大切になってくると思っておりますので、そういった観点から博物館の役目というのはおのずと出てくるのではないかと思います。

続いて、太下委員から手が挙がっておりますので、太下先生お願いいたします。

【太下委員】 今日「現代において博物館に求められる現代的課題とその実行体制について」という非常に大きなお題を頂いて、なおかつ、複数の小規模なミュージアムの事例の御報告も頂いて、非常に私も勉強になっております。ちょっと大きな観点からのお話をさせていただくと、このコロナ禍で、御案内のとおり、ミュージアムの運営に非常に大きなマイナスの影響がもたらされているわけですが、そんな中でも、少なくとも私が見るところの2点は、ポジティブな効果と申しますか、プラスの意味があったように思うのです。

1つは、今日の議論の中にも出ていましたけれども、デジタルアーカイブとインターネット配信の重要性が、このコロナ、そしてステイホーム、そしてミュージアムの活動が十全にできない中で再確認されたのではないかと思います。これは御案内の方もいると思いますが、アメリカのワシントンDCのスミソニアン博物館は、年間3,000万人以上が訪れる、ある意味、今日事例報告していただいた小規模ミュージアムの対極にあるような大規模なミュージアムではありますが、ここがこれからの目標というものを大きく変えたのです。今後5年間で年間10億人が博物館にリーチする、こういう目標を掲げています。年間10億人です。これは当然リアルな来館者ということではなく、デジタルアーカイブとそのインターネット配信というものが前提になっているわけです。これは単にリアルからバーチャルへ事業構造を転換するというだけではないと私は思っています。ミュージアムとして、社会との関係性を変えていこうという決意の表れがこの数字に出ているんだと思うのです。社会との関係性というものはさまざまなチャンネルがあります。今日も御議論が出ていますけど、教育であったり、観光であったり、福祉であったり、コミュニティづくりであったり、いろいろなチャンネルはあり得ると思います。こう考えると、このスミソニアンの目標というのは、決してブロックバスター的な大規模ミュージアムの事例ということではなくて、全てのミュージアムにとって参考になり得る話ではないかと思うので

す。

一方で、では小規模ミュージアムでこういうデジタル化をしていくときどうするのかという議論、今日も出ていましたけれども、やはりこれをサポートする体制というのが必須ではないかと思います。これは今後の文化庁の施策の大きな柱になるだろうと思います。いろいろなやり方はあると思いますけれども、1つには、地域の中核的なミュージアムがサポートしていくような体制をつくるということです。先ほど都道府県立というようなお話も出ていましたけれども、又はさらには、国のミュージアムがそれをサポートするということも考え得るかと思います。

いずれにしても、これを自助努力でやれとか、自治体に手挙げ方式でということになると、逆にデジタル格差のようなものが出てきてしまうと思うので、これに全国的にどう対応していくのかということは、文化庁しかこれを視点として持つことはきっとできないと思うので、今後の博物館政策の大きな柱として議論していきたいと思っています。

もう1点、このコロナ禍で確認されたメリットというか、ポジティブな点というのは、いわゆるブロックバスター型の、収益優先型の展覧会の課題と限界が明確化されたということだと思うのです。こういうふうに言ってしまうと、それは大規模館の話でしょうと思われるかもしれませんが、このブロックバスター型に課題と限界が見えたというその背景には、小規模館にも共通する日本のミュージアムならではの課題があると思っています。すなわち、今日の御議論の中に出ていましたけれども、利用料金制度と、その利用料金制度による補填を前提とした指定管理料の設定という問題です。このような制度は、もはや持続性が無いということです。

一方で、入場規制をするミュージアム運営の中で、ある意味で当然といえば当然なんですけど、結構快適な鑑賞空間が提供されていて、かつてのあの混雑って一体何だったんだろうと思っている鑑賞者も多いと思うのです。ある意味、ミュージアムの鑑賞環境は健全な姿に戻ったと思います。そうすると、その健全な鑑賞環境の姿を実現させるための経営的な手法というものが今後必要になるということです。今までのような指定管理料の設定ではなくて、私はミュージアムにもベーシックインカムが必要だと思っています。最低限の正職員の人員費、それと事業費をきちんとベーシックインカムとして設置者が保障するというのを、何とか運動として広げていくべきではないかと思っております。

あと、ブロックバスター型の限界が見えた中で、私が若干懸念しているのは、これを機に便乗値上げが起こるということを非常に懸念しています。特に国公立のミュージアムにお

いてそういうことをやるというのは非常に問題があると考えておまして、ある意味、経営上の現状の課題を放置したまま、その問題を単に来館者に転嫁するという、決してやってはいけないことではないかと思えます。ちょっとこういった議論も今後この部会でできればと考えております。

取りあえず以上です。

【島谷部会長】 いろいろな大きな課題も含めて、御提言、御提案いただきましてありがとうございました。

出光委員からも手が挙がっておりますので、出光さんお願いいたします。

【出光委員】 私は、私立の出光美術館の館長をしておりますけれども、皆様の今日のお話を聞いて、私立美術館の方がむしろアーカイブ化に対してはすごく遅れているということを感じました。特に、出光美術館は1万件プラス、今度プライスコレクションが入ってまいりましたので、収蔵品がたくさんありますけれども、保存プラスエンジニアの方が1人若しくは、若い方を今育成していますけど、2人という非常にバランスを欠いたような人材配置になっています。

小布施町の例を伺いまして、2年間で臨時の職員の方が12人という、非常に集中的にやった、それだけでもこれだけの検索エンジンシステムなど、非常に高い効果が上がったことを考えれば、我々私立美術館でも、臨時の職員を雇ってまでもするべきではないかと今考えております。

その中で、連想検索エンジンというものがあつたと思うんですけども、文化の森の話ではないですけども、そうした連想の輪を広げていく中で、ほかの大きな美術館のコレクションにも自由にアクセスできるような、そうした画像資料同士のつながりというのが、もっと横に広がっていければいいのではないかと考えています。そうした中、徐々にですけども、古田先生もおっしゃったように、自由に誰かに使ってもらえる素材を提供できるような、そうした気風が学芸員の間で生まれればいいのかなと考えています。

実は、出光美術館の近隣で、デジタルだけを使つての、ちょっとブロックバスター的な展覧会の企画が上がったこともあり、学芸員の中でデジタルアーカイブに関してちょっと後ろ向きになってしまった部分もむしろあつたんですけども、これからは、出水には今まで、ふらっとさんと私たちは呼んでいるんですけど、丸の内に買物に来た方がふらっと入っていただけるというのが我々の美術館のいいところだったんですけども、それがコロナ禍でできないわけですね。入場規制される中で、より能動的に鑑賞していただける方を開

拓しなければならないと思っています。

そうした中で、太下先生もおっしゃっていたベーシックインカム、私たち私立美術館で言う友の会制度の充実だと思うんですけども、友の会の人たちの数を増やしていく、その中に、バーチャル的なミュージアムの提供をしたり、また、入場規制する前に、ちょっとフリーで見ただけの時間をつくるなどなどして、両輪を考えながら経営していく必要があるのではないかと考えております。

今日は先生方から非常に貴重な事例を頂きまして、私も改めて課題が見つかったような気がしております。ありがとうございました。

**【島谷部会長】** どうもありがとうございました。まだ御発言されていない委員がいらっしゃいますけど、浜田先生、何か御発言ありますでしょうか。

**【浜田委員】** すみません、授業の関係で3時前からの参加になってしまい、肝心の報告が聞けなくて大変残念でした。ちょっと論点がずれているかもしれませんが、これまで後半の皆さんの意見を聞いて、思ったことだけお話をさせてもらえたらと思います。

先ほど御発言のあった美濃加茂市長さんのように、博物館に関心の高い政治家が日本に増えれば、多分日本の博物館というのはとても大きく変わっていくのかなと思いつつ、心強くお話を聞かせていただきました。

これまでの話をトータルして聞いていくと、もちろん博物館では、資料ですとか施設は重要なんですけど、やはりポイントは人なのかなと思いました。その人も、学芸員同士というケースもありますし、学芸員と一般職員、あるいは学芸員と市民との関わりも、人と人との問題として多分大きく存在します。これから検討しなければいけないと思ったのは、現在のような財政難が続きますと、どうしても人件費の削減に伴って終身雇用の学芸員が減ってきて、先ほどのどなたかの報告の中にもありましたが、非常勤学芸員ですとか、指定管理者制度に基づく任期付の学芸員がどうしても増えていってしまうというところが、博物館経営の持続性とか継続性のネックになっているのかなと思ったりしました。

そういう中で、先ほど小さいとこネットのお話も出ておりましたが、小規模館であるとか、それから非常勤職員も交えて、そういうざっくばらんな、いわゆる民間の研究会、あるいはグループと呼んでいいと思うんですが、そういうところで横のつながりを持って仕事をしていくというのはとても大事だと思います。

もう一つは、先ほど日博協のお話が出ましたが、日博協とか県博協があるんですが、こうした公式な組織ということになると、博物館の館長ですとか、あるいは博物館で働く専任な

りの職員でないと、やはりそういう場には参加できないと思うんです。ですから、同じ学芸員の集まりであっても、そのような公式的な場とそうでない場というのが両方必要であって、その非公式の場で作った人間関係というのはとても重要に思います。先ほど古田委員が、科博でなかなか難しい場面に直面したというお話がありましたが、私も現場にいた頃にそういう経験があって、多分それが打破できるのは、人脈とか面識があるかどうかということが結構大きい気がします。たとえ相手が大きい館であっても、面識のある人がいると割とスムーズにいったりするのです。そういう意味で、非公式の場であっても、顔をつないで人のネットワークをつくっていくということは、仕事の上でも重要なことだと思います。ですから、公式の場と非公式の場をうまくリンクさせながら、これから博物館の運営とか学芸員の活動の継続性というのを考えていくことが、一つの方向性として考え得ると思ったことが、今日お話を伺っての感想になります。

以上です。

**【島谷部会長】** どうもありがとうございました。最後に人と人のつながりが大切であるというのは、お客様、来館者と我々をつなぐというものもちろんあるんですけど、所有者と我々をつなぐという意味でも、人と人のつながりが日頃からないと、物を借りることはできないということもあります。これは大切にしていかなきゃいけない課題かなと思います。

一通り御発言いただきましたが、最後にこれだけは発言をしておきたいという方がいらっしゃいましたら、挙手なり、事務局に手を挙げていただければと思いますが、よろしゅうございますか。じゃあ逢坂委員。

**【逢坂委員】** 今日はいろいろ意義深い意見交換ができたと思います。でも、文化庁の皆様にとってはデジタル化ということが非常に大きな課題だと思います。でも、ここで明らかになったのが、実際に人に会ってネットワークを広げ、属人とはいえ、活動の幅を広げて具体化していくのは人なので、まず、私たちの世界では、美術館なり博物館なりに自分の体を館内に運んで、自分の五感を使って鑑賞していく、そこでいろいろな体験を蓄積して、密度の高い経験をするということがまず第一義。それを支えるのがデジタルだったりデジタルの可能性だと思います。そのデジタルの可能性を広げるとしたら、またそこで必要になるのは人です。大切なのは、外部発注というのはやはり限界があるということですね。外部発注をするにしても、その外部発注の事業の中身が適切であるとか、クオリティ・コントロールがちゃんとできているかということが発注する側が判断できることが大切です。美術館の中にそういうデジタル若しくはテクニシャンのような専門の職員をきちんと配置するこ



とが、これからデジタル化の推進には不可欠かなと思います。

それからもう一つ、事務方にせよ、学芸員にせよ、その他の職種にせよ、美術館で働く人はみんなもう美術館を支える専門家なんです。とても大切なことは、そういう方たちが皆芸術に対する敬意をきちんと持っているかどうかです。先ほど伊藤館長のお話を伺って、やはり芸術に対する敬意があるということが、大きな意味で美術の世界、文化の世界を豊かにしていくものになるのではないかなと思いました。

【島谷部会長】 どうもありがとうございました。まだ意見は尽きないと思いますが、時間になりましたので、本日の議論は以上までとさせていただきます。

最後に、文化庁から議論のまとめと事務連絡をお願いいたします。

【山田企画調整官】 文化庁企画調整課の山田でございます。本日は皆様、闊達な御議論を頂きましてどうもありがとうございました。

本日、私どもから提案したテーマとしては、デジタル化の問題と小規模館のネットワークということで、大きく2つあったわけですが、まずデジタル化につきましては、このポスト・コロナ、コロナ禍の状況におきまして、改めてそういったデジタル化の有効性というものを確認していただいたということで、特に単なるアーカイブ化ということだけではなくて、館外の人にそれを活用してもらう。学校教育に活用してもらったり、また、館同士でも横のつながりを持つとか、そういった意味でオープンに発信していくことが重要であるということが確認していただけたのではないかと思います。

一方で、こういったデジタル化を進める上で、やはり人材、専門の方をきちっと体制の中に継続的につくっていくことが必要ではないか。これに対してどういうふうをサポートしていくかということの議論が必要であるというような御議論もいただいております。ただ単なるデジタル化ということだけではなくて、もちろん本物の展示とのバランス、学芸の方との連携といったものが重要であるという御指摘も頂きました。

また、2点目のネットワーク化につきましては、本日御発表いただきましたような小規模館にとって、特にこういった非公式な職員のネットワークというのが、人脈づくり、あるいは勉強、資質向上の上で大変有効であるということの御指摘が多々ございました。また、こういったネットワークの活用の在り方としましては、例えば、このデジタル化のような専門人材を共有していく仕組みとして使う、あるいは資料のやり取りであったり、共同の展覧会の企画とか、そういったものも考えられるということで、こういったネットワークについてどういった支援が適切か。その中で、例えば県レベルの果たす役割はどういったものがある

かということについても議論してはどうかというようなお話があったと認識しております。

今後、本日いただいた御意見も踏まえまして、文化庁の方で更に論点を整理して、今後のまとめに生かしていきたいと思っております。

最後に1点、補足になりますが、ネットワークの御議論の中で、文化庁の補助事業がネットワークへの支援の対象になっていないのではないかと御指摘もございましたけれども、その点を補足で御説明いたしますと、本日の資料の6ページに配布しております地域と共働の事業におきましては、こういった博物館のネットワークというのも補助の対象となり得るということですので、その旨は御説明を補足したいと思います。

それでは事務連絡でございます。次回のこの部会につきましては、1月13日水曜日、14時から16時を予定しておりますので、皆様、御予定を御確認お願いいたします。それ以降の会議日程につきましては、また別途メールの方でも連絡をさせていただきます。

本日は対面の出席の方とオンラインの参加の方、両方いらっしゃったわけですが、オンライン参加の方で、もし接続などで不都合等ありましたら、後ほど事務局の方にお知らせいただければと思います。

私からは以上です。ありがとうございました。

**【島谷部会長】** どうもありがとうございました。それでは、第2期第4回の博物館部会を閉会いたします。次回の第5回は、登録博物館制度を中心とした今後の博物館行政の在り方に関して議論を始めたいと考えておりますので、各委員におかれましては、次回もどうぞよろしくお願いいたします。本日は御協力いただきまして、ありがとうございました。お疲れさまです。

— 了 —